

TOUR DE HOKKAIDO 2006 NEWS

1st.Stage 2006年9月14日発行

区間個人順位

順位	名前	チーム	タイム
1	ウェズリー・サルツバーガー	オーストラリア	4:04:01
2	宮沢 崇史	V A N G	+0:00
3	鈴木 真理	ミヤタ・スバル	+0:00
4	廣瀬 佳正	スキル・シマノ	+0:00
5	盛 一 大	愛三工業	+0:00
6	ライ クアンファ	チャイニースタイベ	+0:00

個人ポイント賞順位

順位	名前	チーム	ポイント
1	盛 一 大	愛三工業	27
2	ウェズリー・サルツバーガー	オーストラリア	25
3	宮沢 崇史	V A N G	22
4	鈴木 真理	ミヤタ・スバル	19
5	マリウス・ヴィズィアック	N I P P O	14
6	廣瀬 佳正	スキル・シマノ	14

団体総合順位

順位	チーム名	タイム
1	愛三工業	12:21:50
2	カナダ	+0:04
3	スキル・シマノ	+0:16
4	V A N G	+0:17
5	ミヤタ・スバル	+0:23
6	ブリヂストン・アンカー	+0:40
7	オーストラリア	+6:53
8	N I P P O	+6:55
9	マトリックス	+7:17
10	ドイツ	+7:33
11	チャイニースタイベ	+7:49
12	鹿屋体育大学	+14:19
13	北海道地域選抜	+14:33
14	法政大学	+14:39
15	韓国	+21:11

個人総合時間順位

順位	名前	チーム	タイム
1	盛 一 大	愛三工業	4:07:10
2	ウェズリー・サルツバーガー	オーストラリア	+0:02
3	西谷 泰治	愛三工業	+0:03
4	エリック・ウォルバーク	カナダ	+0:05
5	岡崎 和也	N I P P O	+0:05
6	アンドリュー・ランデル	カナダ	+0:07

個人山岳賞順位

順位	名前	チーム	ポイント
1	辻 善 光	立命館大学	14
2	中島 康晴	鹿屋体育大学	10
3	普久原 奨	ブリヂストン・アンカー	6
4	土井 雪広	スキル・シマノ	3
5	鈴木 真理	ミヤタ・スバル	2
6	別 府 匠	愛三工業	1

1st.Stage サルツバーガーがステージ制覇。学生の辻が山岳賞ジャージ獲得

第1ステージは旭川市大雪アリーナ前をスタート。上紋峠を通過し、名寄市JR駅前にフィニッシュする169km。

スタート後、アタックを繰り返されるがなかなか決まらない。最初のホットスポットまで逃げは決まらず。ホットスポット1位はマリウス・ヴィズィアック(チームNIPPO)。ボーナスタイムを獲得しパーチャルリーダーとなった。

そのホットスポットの後、今年のインカレチャンプの中島康晴(鹿屋体育大学)と辻善光(立命館大学)が逃げを決めた。その後、普久原奨(ブリヂストン・アンカー)が先頭2人に追いつく。

最初のKOM(山岳ポイント)、3人はタイム差を保って好調に逃げる。1位通過は辻善光(立命館大学)、1分30秒遅れて集団が通過。先頭は鈴木真理(ミヤタ・スバル)。

2回目のKOM、上紋峠の上りの序盤メイン集団はスローペースだったが、中盤からペースがあがり、メイン集団は分裂する。しかし、先頭3人は逃げ切って山頂を通過。1回目と同じく辻が先頭で通過し、山岳賞ジャージを獲得した。20



JR名寄駅前でフィニッシュとなった第1ステージは、山岳区間でしぼられた33人のスプリント勝負となり、サルツバーガーが制した Photo:MATRIX

回目にして、初めて学生が特別ジャージを着用することになった。

分裂した集団は、下り区間で逃げていた3人を吸収して、先頭集団は35人。パーチャルリーダーとなっていたヴィズィアックは遅れていた。

そのあと補給所でリーダージャージの盛が落車する。怪我の具合が心配されたが、すぐに集団に復帰。そのあとのホッ



最初のホットスポット後の山岳区間で逃げた3人。立命館大学の辻善光は、2度のKOMをトップで通過して、山岳賞ジャージを獲得した

トスポットはなんとトップ通過。貴重なボーナスタイムを獲得した。

残り20kmの3つ目のホットスポットも33人のまま。1位はカルステン・リーゲル(ドイツ)だった。

その後も逃げは決まらず、集団でのスプリント勝負になり、ウェズリー・サルツバーガー(オーストラリア)が優勝を飾った。

Next Stage リーダージャージを守った愛三工業。ボーナスタイム争いに注目

4連続でリーダージャージを獲得した愛三工業は、4度目の第1ステージ、リーダージャージ防衛に挑んだ。そして、ついにリーダージャージ防衛を成功させた。

集団をコントロールし、ホットスポットも獲得。ときにはアタックも仕掛ける積極的な走りをみせて、ステージ優勝したサルツバーガーを2秒差で退けた。しかし、序盤のステージからかなり疲労度の高いレースを展開しているようにも見えた。第2ステージ以降、どんな展開にもっていくのか楽しみだ。

第2ステージは土別市から深川市まで、途中日本海沿いも走る185km。前半にKOMが2つ連続して、中盤にホットス

ポットが2つ。そして最後に1つKOMが設定されているが、比較的高低差のないステージだ。

総合争いがまだ秒差で争われているだけに、途中のホットスポットとフィニッシュに設定されているボーナスタイムが重要になってくる。第2ステージはこのボーナスタイム争いに注目しておきたい。

そして、20回の歴史で初めて学生が袖を通した山岳賞ジャージの行方にも注目したい。序盤の2つと終盤の1つあるKOM。すべてカテゴリー3だが、どう走るかによって山岳賞の逆転はありえる。山岳賞ジャージを着る立命館大学の辻はどこまで粘れるか。



4度目の挑戦にして初めて、リーダージャージを守った愛三工業。守りの走りではなく、積極的な攻めの姿勢をみせた結果か。次はどんな走りをするか？